

昨日今日：文苑

著者	栗林，卯平
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 4 1
ページ	3 5 - 4 2
発行年	1911-06-05
URL	http://hdl.handle.net/2298/6225

而かも其の歌は商人にも官吏にも町の人にも皆なに非常に氣に入つた、それが爲め毎日々々二度ならず二度ならず十廻までも招かれた。(完)

昨日 今日

(一)

栗 林 卯 平

田崎はこの頃不思議な夢を見る様になつた、灰色の寂しい別天地を夕方になると、いつも一人で歩いて居る。力無い夕日は涯しも知れない大曠原を斜に照らして總てが褐色に枯れた、草叢の間を、糸の様に縫うた、小路を田崎は唯だあてもなく歩いて行く。

脚下には深さも知れない底の底で、闇から闇へと通り過ぎる、恐怖の流と云ふ様なものが、ゴウゴウと絶え間もなく流れて、其の音を越した向うには、死んだ佐々木の姿が光もなく立つたまゝ、コチラエノとさじ招くので、ついて行くと、わきまりの様に自分も佐々木と一所に死んだ夢を見る。

一体なぜ、こんな夢を見るだらう。

神經の疲れから、こんな悪夢が起るにしても、昨夜も其の前の晩も、こうした同じ夢を見るとは何かの前兆がないとも限らない。一体なぜだらう。

目がさめると田崎は獨りで裏庭に出た、ポカポカと暖い春の日は、一面に柔かい光を草や庭木の上になげで

澄みきつた太空を小鳥の群れが幾つとなく通る。例の所へ行かう彼はさうつぶやいて、母屋の横から右の多いデコボコ道を森の方へとブラ／＼歩いた、泥川にそうた小路を二丁計り行つて、右手に折れると直ぐ森への入口で、檜檜などの樹が一ぱい茂っている。

頂は可なり廣い場所であつた。昨日棄てた敷島の殻が、其處の小松の下に未だ残つて居た。

そこからは一圓の村落を眼下に見下して、褪せた赤の三角旗を樹てた、小學校、大きい楠の生ゐてる寺院など、手の届きそうである。緑川の流れは東から西、西から北へと、光つて流れて、其の谷間、谷間には、松杉などの喬木類の群れが、斑をとつて、立つている。

偉大なる自然の姿——春がきても、夏がきても、いくらも變りのない、この自然の姿に親しむ時彼は氣儘な空想の翼にのつて、現世の苦痛を忘れんが爲め、嘗つては、どんなになづかしく想つたであらう。けれど、もうだめだ。彼はこの頃、いつもこの廣場に登つて、死んだ佐々木の一生を種々と想ひめぐらすのが、彼の日課の様になつた。

自然に對する悲しき追懷——佐々木の痛しき一生、——これやがて彼の悲しい運命の暗示ではないかと思うと、田崎は聲をあげて、泣きたい程苦痛を覺えた。

二.

佐々木と彼と近づきになつたのは余り永い事ではなかつた。田崎がA村の小學校に教鞭を取る爲に赴任したのは、今から三年前の庭には卯の花の咲きつゞく頃であつた。其頃一ツ年下の佐々木は善く學校で一日遊んで暮した。田崎は元來文學者になりたかつた。彼は勉めて文學の書を涉獵し成るべく哲學の書から離れまぬ

と注意していた。いくらか瞑想的であり、偏狹であつた田崎は、なるべく人と近づきにならうとはせず、却つて孤獨な生活を樂しんだ。暇さへあれば彼はグラウンドの横に、寝ころんで、種々の書を廣げて、自分の思想が矢張り潤うて居るか、どうか、詩人としての立場が、どうか、いろんな事を考へて、樂しんで居た。幾日か續いた後の雨が奇麗に晴れ上つて、雨に洗はれた、若葉の緑が目覺むる様に美くしい、五月の或日の午後であつた。田崎は獨り運動場の隅に立ち並んだ、松蔭に身をなげ出して獨歩集を讀み耽つて居た所へ思ひ懸けなくも佐々木が大手を振つてやつてきた。日もかゞさす毎日顔は合はせるが言葉をかわしたのは唯一二度ぎりで、心悪くい迄に快活な佐々木の態度を田崎は嫉ましく思つた事もある。

『君——其れは何ですか』と突然覗き込む様にして、佐々木が尋ねた、

『これ——これですか獨歩集です』

田崎はツマランと云ふ様な風をして簡單に答へた。

『君、文學が好きと見えますね』

『ハア』

『それじや文學者になりたいんですか』

田崎は其れには答へなかつた、折角人目をさけて、瞑想を樂しんだ此の刹那を、こんな無骨な男に、さまたげられるのが心中、不快でたまらない。

『君文學なんぞ、止したまへ、』

佐々木はこうハツキリ言つて、稍暫くしてから、

「要するに文學なんぞ婦女子の弄ぶ閑事業に過ぎない弱々しい情調に泣かされたり、つまらぬ空想に耽つたり、其れだけなら猶善いが、遂には自分自から小説の主人公とまねて、放浪とか、耽弱とか絶望的な事計りなつて、自分で自分の身を亡はす、——僕なんか大嫌いです、——」

「其れでも君、肉体上の慰安と精神上の慰安とはごちらに其の價值があると思うのです、肉に死んだ体を靈に生くこれが吾々の文學を憧憬する第一の原因です」

田崎は思ひ切つて答へた。と佐々木は其所ぞ言はん計りに、

「さうだ、けれど、新らしき時代の空氣を吸ひ、新らしき時代の智識を味つた吾々は文學なんぞに捉はるゝには余りに強い男ではありませむか、生き生きた自我と漲る青春の情とを以て、女々しい、情の勝利者として誇らんよりは、僕は寧ろ事業に生きて朱殿玉樓の夢をむさばりたい。これが吾々強者のたどるべき道ではないかと思ふのです。」

佐々木の語勢は強かつた、美くしい頬には上氣した血が薄赤く暈されて、キツト結んだ口元には男らしい氣分がホノ見ぬた。

田崎は變な男だと思つた、余り親しくない自分に、文學の價值を否定して、高調子で説き立つるなんて、さう見ても變な男だ、第一、文學を以て弱者の道であると罵り、物質上の快樂を追求するなぞこれでも新時代の空氣を吸つた人間としての言葉だらうか、これが果して強者の道であらうか。

「淺間しき肉の追求者」田崎は味氣なく思つた、随分思ひきつて、説破してやらうかとも思つたが、其の日は其のまゝに別れた、別れて田崎は自分の思想と余りに懸隔のあるのに驚歎の目を見張つた。

自分達は唯だ衝動のまゝに動く寂しい消極的な繩張りの中に執着して冷い生のなきがらを眺めて居るより放浪から放浪とつきの歡樂を追求して、野でも善い、山でも善い、自分達の墓場は、どこにもある、強い色彩に憧れて、苦悶して止まぬ心靈の安住の宅を捜し出す事に勉める。其所に近代人の、避くべからざる努力があるかと思う。朱殿玉樓の榮華もよからう、けれど、それで自分の苦悶がたまるであらうか、佐々木は矢張り、口では偉さうな事を言つても足だけ新らしい時代の土地を踏んで、頭は古い夢を見てゐる、古い淡い輪廓を画いて、無理に新らしい色彩で塗抹しようと思つてゐると思つた田崎は佐々木を可愛相とも思つたが又面白いとも思う。田崎と佐々木とは其の主張する所に於て、全く反對の立場をさし示たけれど其の異なつた所に却つて、二人を近づきにさせる機會を與へた。佐々木は其の後も根氣よく論陣を張つた、田崎も亦相應に應戦した。

三

田崎は自分で、弱い男だと自覺した時、佐々木の快活な態度と美くしい表情を思ひ浮べて、自分の心を引き立てた、田崎は時々、こんな事を思つた事もある。

「佐々木は美しい男だし、世間と云ふものを淺く考へて、いつも甘い夢を見ている、けれどあんなに荒つばく生の路を軽い步調で歩いてるものに限つて、ともすると死を急ぎたがるもんだ」
夏も暮れて秋が來た、山々の落葉木は薄紅にそんで野面を渡る風が一しほ心地よく吹く中を蟲が滋々とおねねと鳴き出した、

A村からB村に轉住した田崎は、この頃から佐々木と手紙を取りがわした、手段を罵り政治を、あざけり、

功名富貴の淡い夢であると云ふ様な事を細かに、こちらから手紙でやると、其の返事にはきつと文學と云ふも要するに、空論家の議論に過ぎない、死んでは元素に歸るのが、人間の狀態ではないか。いくら瘦我慢を張つても、人間はごうせ、甘いもの食はずには生きては居られない。君が富貴榮達を輕蔑しても、僕は矢張り其の志を放棄する譯にはいかん。いくら努力しても、努力しても、文學上の成功は困難だ、名の美くしい理想を望むよりも充實した目的に歸り給へと、こう書て來た、田崎は一にも二にも榮達を忘れきらない彼の心を淺間しいとも思つたが、萬更彼を棄つる氣にもならなかつた。

其の後突然佐々木から手紙がブツツリ來なくなつた。或はツマラヌ事に腹立てゝ居るではないかと少しは氣懸りもして、土曜日の午後から久々振りで尋ねて見ようかとも思つたが、サア行かうと思ふ時に何となく自分のグライドを傷づけられる様な心地がして其のまゝ止めた事もあつた。

『僕は今暫く君と別れねばならぬなせかと反問されたら僕は、こうとはつきりした答をなしたくはない。唯だ一言君にいつて置く、僕は相愛した女があつた、けれど、もう、だめた。ア、僕は強い色彩が欲しい、行く、行く、僕は南洋に走つて、戀に死んだ体を事業に生かせる爲に斷然行く。僕はなせ薄赤い花を、優しい花と思つたらう。』

こんな手紙を得たのは手紙が來なくなつてから五ヶ月計り後であつた、田崎は暗然と涙ぐんだ。

四、

南洋へ着いてからは時々手紙がきた、もう先の夢見る様な淺薄な手紙とは異なつて、何となく落ちついた暗い影がまづはつて見ゆる様な氣がした。ブタブクと泡立つ南洋の海際に、柳子樹の風は冷く頬を吹いて、故

郷戀しと思う時熱砂を枕に夢路に入るものは矢張り朱殿玉樓の榮華の様であつたらうか。戀愛とは文學家が文學上の美名をかつて、徒らに人間の獸性を歌うのに過ぎないと罵つた彼は、戀愛そのものが、彼も彼の事業もデリ／＼と喰ひつくしているのに氣付かなかつた。矢張り夢を見ている、戀の苦さを忘れないでも、事業の甘さも忘れないでいる。彼は徒らに大手を擴げて、何もない虚空をつかむ様なものであつた、事業に生きていゝと云う彼の望は、もう彼の手の届く中から、それていた。

事業の失敗から起る外部の苦悶と内部の動搖とは、殆ど彼の精神を錯亂させて、瘦せ細びた彼の肉体は少くとも現世の面影を止めているにしても、彼の精神は最早や、彼の一身を飾るには色の褪せた繪具に過ぎなかつた。南洋の秋を不安から不安と續いた日に暮して、冬らしい風が吹きまくる或朝の事、召使の女が掃除の爲に室へは入ると、彼は仰向けに倒れていた、右手には小さい短刀をもつて、白フランネルのシャツは眞ッ赤く血にそまつて、――佐々木はどう／＼自然の死を待ちきらずに自分で自分の身を殺した。文學を罵つた彼は自分自ら文學者らしい運命をどげた。彼は死ぬ間際まで、矢張り榮華の夢を見て居たであらうか。佐々木は死んだ。田崎は自分の身に引き比べて黯然たらざるを得なかつた。涯しも知れない暗い人生の路を佐々木は余りに淨調子で歩いて居た。一寸、つまづくも生存の糸は余りにアツ氣なく斷ちきれた。

田崎はこれまで死と云ふ事を度々考へた。世の中をつまらぬと思う時、身の不甲斐ないと思う時、彼は死んだら、すつかりしよ／＼と思つたが、生存慾と云ふものに、さまたげられて、自分で自分を殺す様な勇氣も出ず、不甲斐無い体を、不平と怨恨の有りだけをつくして持ち續けている。

「弱い男だ」と思う時、彼は三年變らずの現在の務をどんなに悲しく思つたらう。田崎は自分で萎縮しても

う、明るい世の中を歩け無い様な氣がした、世間の人々は様々な目付や態度をして、一々自分を侮る様だ。華な日照の中を新らしい美しい粧をした世間の人はいそ／＼と歩いていくけれども自分獨り其の列に後れた様な氣もする。田崎はもう苦痛なしに、自分の身を考ゐられなくなつたと同時に人の身を苦痛なしには考ゐられなくなつた。

思ひ切つて暗い所を歩かう、——こう思う時もあるが歩いたら、どうなる。——日光の通さぬ日蔭の草が青白く生氣のない様に、自分も又しなびれる様に斃れるじやあるまいか。

半面の明るみと半面の暗黒。——其の間を巧に渡つて行く事は田崎にはとても出来ない、佐々木は死んだ。けれど善い死を遂げた。彼は眞劍に死と云う人間の確かな事實となしとげた。其れが確かに強者の路だ。

非常時には讓與も割愛もない、眞劍となつて、自我の生存を計るのが人間の確かな事實だと言つた人もあるが、田崎にはとてもそんな悠長な事は出来ない、彼は非常時には死と云ふ事實より外には手段はないと考ゐた、それにしても昨日今日の夢は後であらうか。

死んだ佐々木の運命と自分の運命とは直線的に連つて居る様だ。暗い暗い不安の日が斯くの如くして幾年か連りたら其の先は——。

青い顔をして田崎は空を仰いだ。入日の後の空は一層美しく、村近くの共同墓地には黒味がかつた吊旗、が靜に風に揺れていた。(完)